

4 学校施設の有効活用

学校施設老朽化対策ビジョンにおける指摘のポイント

- 学校施設の規模については、将来の児童生徒数の動向等を見極めつつ、適切な規模に見直していくことも必要である。
- この際、余裕教室などの空きスペースの有効活用をより一層進めるとともに、学校施設が地域の核となることも視野に入れ、他の公共施設との複合化・共用化を図ることも考えられる。

掲載事例

ここでは、老朽化した学校施設を改修する際に、行政財産を有効に活用する観点から、図書館・公民館との複合化を実施した事例や余裕教室を老人福祉施設へと転用した事例を紹介する。

また、余裕教室や廃校となった高等学校を、需要が高まっている特別支援学級や特別支援学校に転用することで施設の有効活用を図っている事例を紹介する。

◆地域の実情に応じた多機能化

- 4-1 志木市立志木小学校（埼玉県） 既存校舎を活用した公共施設複合化
- 4-2 向日市立第4向陽小学校（京都府） 余裕教室の老人福祉施設への転用による複合化

◆余裕教室の活用等

- 4-3 香取市立佐原小学校（千葉県） 余裕教室の特別支援学級等への転用
- 4-4 東京都立永福学園（東京都） 廃校となった高等学校の有効活用



4-1

既存校舎を活用した公共施設複合化

埼玉県

志木市立志木小学校

1：背景

主に建物の老朽化と耐震性の問題があった旧志木小学校（昭和29年・40・52年築）、旧志木公民館（昭和40年築）及び旧志木図書館（昭和42年築）について、学校教育と社会教育の融合を図るだけでなく、保有する土地や学校施設の有効活用の観点から、複合化の計画に至った。

公募により「志木小学校・社会教育施設等複合施設検討会」を設置し、学社融合となる基本構想を策定し、プロ

ポーザルコンペにより設計会社を選定した。複合化に当たっては、既存の校舎を全て改築するのではなく、一部の校舎については、耐震補強や大規模改修を実施した。既存校舎部分と改築部分とが一体的に計画されている。

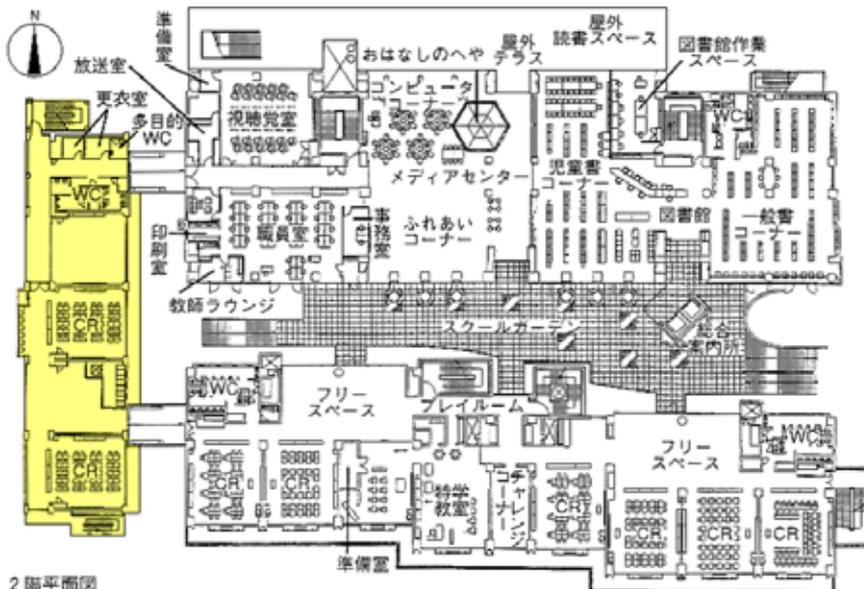
2：取組内容

既存校舎の改修

既存校舎である南校舎については、窓側部分にブレースを設置し耐震補強を施すだけでなく、教室間の仕切り壁を撤去し、オープンスペースを設けることで、多様な教育内容に対応できるようにした。

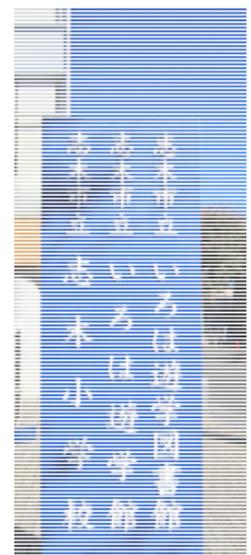
また、耐震補強を行うに当たり、家庭科教室では1つの壁を取り去り、鉄骨補強フレームで補強し、開放部の圧迫感を極力抑えるよう工夫している。

冷暖房設備の設置、内装の木質化やトイレ改修などにより改築部分と遜色ないほど全面的にリニューアルした。



2 階平面図

配置図（黄色部分が改修校舎）



複合化した施設としての改築

複合化に当たっては、十分な安全性が確保されるよう配慮した計画とした。

例えば、警備員常駐の総合案内所を施設利用者が必ず通る場所に設置し、また、職員室を図書館と隣接する一般の人の出入りの多い場所に配置し、廊下と高さ約1mのカウンターで区切られた見通しの良い空間とすることで、容易に不審者を中心に進入させないよう工夫した。

3：特に留意した点

教室のオープン化などの平面的な工夫や、新築部分との調和を考え色調も合わせ統一感が図られた外壁塗装など、学社融合の趣旨に合致するよう計画した。

さらに、施設の有効活用を意識し、小学校の特別教室（音楽室・理科室・調理実習室・家庭科教室等）を、児童が利用しない夜間、休日及び長期休暇中には一般市民に開放するようにした。また、図書館の休館日でも児童が使用できるよう計画している。

4：成果と課題

複合化後10年が経過したが、改修した部分は、改築した部分と比べても遜色なく使用できている。

また、地域社会（利用者市民等）との直接的なふれあいを通して、子どもたちの知恵、知識、社会性を育み、子どもたちが自ら学び自ら考える教育を推進することができた。

なお、安全管理面については、防犯カメラの設置及び人的配置により万全の態勢を取っているが、今後、関係職員や多くの利用者などの協力により、より一層の安全確保に努めなければならない。



改修前



改修後

オープン化され、多様な授業に対応可能な普通教室



教室の界壁を撤去した梁柱をH型鉄骨で補強した家庭科教室

改築部分



図書館と学校を緩やかに区切る職員室
(廊下側から撮影)



図書館やパソコン教室は
広く一般の人でも活用するスペース



併設された遊学館
(合唱の練習中)



老人福祉施設用出入口



和室



玄関

4-2

余裕教室の老人福祉施設への転用による複合化

京都府

向日市立第4向陽小学校

1：背景

向日市は昭和30年代後半から宅地化が進み、他地域からの転入が急増した京都府下最高の過密地域である。今後、着実に高齢化が進むことが見込まれるが、老人福祉施設は南部地域に1か所設置されているのみであり、利用者の増加により施設が手狭となり、北部地域への設置の要望が市民から寄せられていた。

一方、近年、児童生徒の減少により余裕教室が生じており、行政財産の効率的かつ有効な運用の観点から、余裕教室を地域の実情に応じて、生涯学習や社会福祉等の用途に積極的に活用することが重要であると考えていた。

2：取組内容

築27年（当時）の校舎について、耐震補強を行うとともに、老人福祉施設に転用するための改修等を行った。

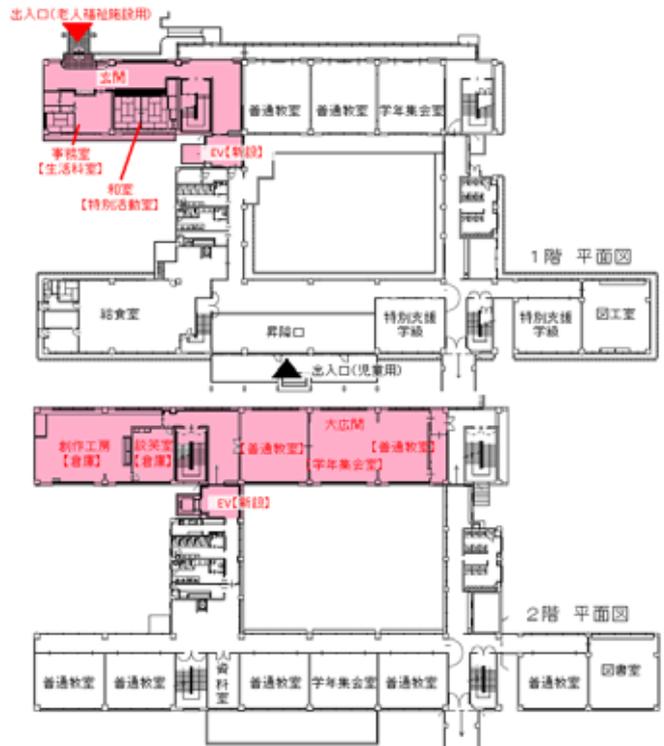
- 従来、学年集会室や倉庫として使用されていた余裕教室を老人福祉施設の事務室や陶芸・工芸等ができる創作工房、多目的な利用ができる大広間に改造
- 老人福祉施設に出入りするための専用玄関を設置
- エレベータの設置、ライフラインの更新等
- その他学校部分の改修（ランチルームの設置等）

工事費（工事面積）

小学校：168,612千円（1,323㎡）
老人福祉施設：162,557千円（993㎡）

3：特に留意した点

余裕教室の活用については、学校施設に不足が生じないことや児童の安全及び教育環境に十分配慮することが重要であり、学校教育の実施に支障が生じないよう、学校、保護者及び地域住民と協議を重ねた。



改修後の平面図

（ピンク色の部分が老人福祉施設、括弧内は転用前の用途）

また、児童と高齢者の動線と活動時間が異なることによって生じる相互干渉が懸念されるため、それぞれの施設が独立した運営を行えるよう動線を分離し活動範囲を制限しながら世代間交流が図れるよう計画した。

4：成果と課題

高齢者が児童に昔の遊びを教え、給食を一緒に食べるなどの機会が設けられており、豊富な経験や知識・技能を有する高齢者から、様々な生きた知識や生き方を学ぶことができることは、今日重視されている児童の体験学習の一層の推進に寄与できているものと考えている。

改修後10年余り経過したが、新築と同様の使用感を持続させ、施設の長寿命化を図ることは行政の責務である。厳しい財政状況の中、今後もこのような複合化を進めることは有効であると考えられる。

4-3

余裕教室の特別支援学級等への転用

千葉県

香取市立佐原小学校

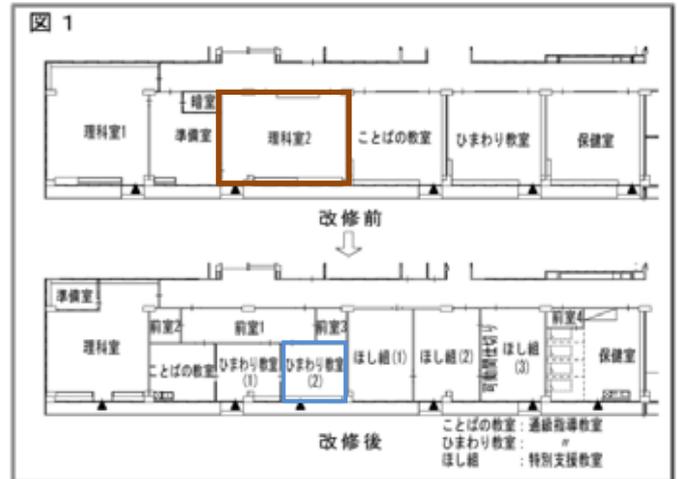


改修前
(理科室)

1：背景

香取市立佐原小学校は、一時は約2,000人の児童が在籍していたこともあるが、現在は約950人程度まで児童数が減少しており、余裕教室が多くなっていました。

そこで、3棟ある校舎のうち市道を挟んだ別敷地にある1棟は、通常の授業では使い勝手が悪いため、放課後児童クラブのために活用することとした。また、通常授業を行うことになる2棟のうち1棟は、これまで大きな改修履歴がなく、老朽化が顕著であったため、耐震補強工事と併せて老朽改修工事を行い、その際、使用頻度の低い教室を特別支援学級等に転用した。



2：取組内容

余裕特別教室の転用

従来の通級指導教室は、普通教室であった余裕教室を改修を伴わずに転用したものであり、使用実態に比して過大規模であった。そこで1階に2室あった理科室を、使用頻度が少ないため1室とし、理科室と理科準備室を通級指導教室3室に改修した。当教室には他校からも児童が通っているため、前室を設けて保護者が待機できるようにした。

また、特別支援学級のうち1学級は1階、2学級は別棟の校舎に位置していたが、従来の特別支援学級と通級指導教室を特別支援学級3教室に改修した。このうち2教室の間の間仕切りを可動とし、授業形態や学級規模に柔軟に対応できるようにした。



改修後 (通級指導教室)

教室配置の見直し

余裕教室の転用に伴い、これまで無計画であった教室配置を見直し、使用頻度の少ない特別教室を普通教室や通級指導教室へ転用するなどして、教室配置を整理した。その結果、これまで別棟の校舎に教室があった学級も含めて全学級が同一棟の校舎で学ぶことが可能になった。

3：特に留意したこと

余裕教室の転用及び教室配置の見直しを行った際に、学級数の増加による不便さや窮屈さを生じさせないように、実際に使用している教職員の声を聞いた。その際、「蛇口の数を増やしてほしい」「トイレの個数を増やしてほしい」

といった、休み時間に児童が集中的に利用する施設についての意見が多く出たため、設計に反映させた。

また、通級指導教室については対象児童数が年々増加していたため、増設して今後も増加が予想される通級指導に対応できるようにした。

4：成果と課題

今回の改修は、余裕教室の転用を目的としており、校舎を1棟減らすと余裕教室が少なくなってしまうおそれもあったが、理科室を通級指導教室に改修することなどにより、教室を集約することができた。

しかし、通級指導教室は遮音性が十分とは言えないため、個別指導で静かな授業環境化では隣室からの音が気になる状況である。大規模改修における少人数指導対応教室の整備においては、少人数ならではの教室環境を考慮した施設計画が重要である。



普通教室



カフェを模した実習室

4-4

廃校となった高等学校の有効活用

東京都

東京都立永福学園

1：背景

東京都教育委員会では、都立永福高等学校（以下「永福高校」という。）を平成9年9月に策定した「都立高校改革推進計画」に基づき、平成16年3月に閉校した。

一方、都立永福学園を平成16年11月に策定した「東京都特別支援教育推進計画」に基づき、知的障害が軽い生徒全員の企業就労の達成を目指す新しいタイプの高等部職業学科（就業技術科）（以下「職業学科」という。）と肢体不自由教育部門を併置する特別支援学校として設置することにした。

同学園設置に当たっては、旧永福高校の校舎を活用して設置することにした。

2：取組内容

旧永福高校の校舎は耐震補強工事も含めた改修工事を行い、職業学科が利用する普通教室、職員室などを整備した。その際、旧永福高校のエントランススペースを採光と広さが十分に取れた保健室に改修し、階段教室形式の視聴覚室を1学年100人の生徒の集会ができる場として現存させるなど、既存校舎の利点を最大限有効に活用した。

また、旧永福高校のグラウンドなどの敷地に、職業学科が利用する職業実習室などを設置するとともに、肢体不自由教育部門を併設するための増築工事を行った。

普通教室

職業学科の普通教室については、1学級の定員数である10人分の広さ及び3学年合わせて30学級分の教室の確保を考慮して、改修前、40人学級用だった2教室（各8.7m×7.8m程度）を分割して3教室に改修した。

「働く場」を想定した実習室

職業学科の卒業生が、企業にとって即戦力として期待されるように、将来の就職先を想定した職業教育コースを設け、職業実習室の設置に当たっては、旧永福高校の



職員室



改修前（旧調理室）

特別教室の旧排水設備を活かして、厨房やカフェなどに改修した。

工事費用：3,939,745千円

（改修面積：8,424㎡，増築面積：7,781㎡）

3：特に留意した点

旧永福高校の校舎を、特別支援学校として活用するため、全教室に空調機器を整備するとともに、段差を減らすなどのバリアフリー改修工事を行った。

4：成果と課題

既存施設を改修することにより、校舎解体費用・躯体工事費用を抑えることができた。

しかし改修後5年が経過した現時点では、改修を行わなかった地下に埋設された水道管などが老朽化し、その対応が課題となっている。

